

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 奥 協 徳

一、入隊からシベリア抑留まで

私は、大正十四（一九二五）年十一月五日、本籍で出生。山梨航空技術学校を卒業後、昭和十八（一九四三）年十一月十日、現役志願兵として仙台市東部第一一二部隊航空教育隊に入隊。同年九月、満州国滨江省佳木斯飛行連隊に転属し飛行機整備兵として勤務。続いて昭和二十年八月奉天（瀋陽）飛行場において勤務中、ソ連軍がソ満国境を突破して満州国に南下を開始したという情報を聞き、奉天飛行場周辺にざんごうを掘って戦車攻撃に備えながら十五日正午、天皇陛下の終戦の詔勅を聞き、まさか日本が負けることはと部隊全員がっかりしたが、十七日午後、ソ連兵が奉天飛行場に侵入してきたため部隊は戦わずして武装解除

され、私ども部隊全員、奉天小学校に集結し收容されました。その收容所で作業隊編成があり、ソ連軍の命令によって三十人編成の数組が動員され、毎日鞍山製鉄所の解体作業に従事させられ、十一月末まで一日八時間労働でこき使われました。

十一月末、私どもの部隊は千人組の作業隊に再編成され、鞍山駅から「東京ダモイ（帰る）だ」とだまされて鉄の家畜輸送車に乗せられ、一カ月もかかってウズベクスタンの首都タシケント市の近くにあるアングレンという小さな街の收容所に入れられました。

この收容所は先にドイツ人捕虜が收容されていたという半地下式の木造ハウスで、一棟百人が生活できる大きな隊舎でした。真ん中に一・五メートルくらいの通路があり、両側に二段ベッド式の板張りの座敷に毛布一枚のごろ寝でした。

二、石炭掘削の地下作業に酷使されて!!

仕事はアングレン街近くの地下鉦山の石炭掘削作業でした。一日三交代で八時間労働、ノルマはありましたが、この炭坑には大勢のウズベツクの地方人が働いていましたのでそれほどノルマが過大でなかった。まじめに働けば毎日一〇〇%の成果を上げられましたので「ヤポンスキー・ハラシヨールポーター（日本人は働き者だなあ）」と褒められたものでした。

給与は黒パン、燕麦、雑穀等が規定によって配給されたようでしたが、ピンはねされてか、我々に配給される量が少なくいつも空腹で、みんな次第にやせて栄養失調患者（三級軽病人）が多く出ました。また、炭塵で胸を患う病人も多く出て、収容所長の衛生管理が悪いのではないかと本部から再三注意を受けました。一番困ったことは、衣服は着たままで交換もなく二年、入浴はなくシャワーを一週間に一、二回浴びるだけ、それでもシラミが少し出ましたが伝染病は出なくて幸いでし

た。

冬季、タシケント地方は零下三〇度まで下がりますが、炭坑は地下式でしたので零下五度くらいでしたから比較的越冬は楽でした。困ったことにソ連の軍医は健康管理が全くでたらめで、熱が出ない人は病人ではないと言って休ませてくれず、栄養失調者やリウマチ患者はうそつきだと作業に出され苦労しました。私は昭和二十二年夏ごろマラリア病に侵され高熱が出ましたので、ソ連の軍医も日本の軍医も親切によく見てくれて感謝しています。

収容所の中では「日本新聞」が配られ、民主運動とか、プロレタリア革命論とか、研究会も組織されましたが、私ども仕事（炭坑）場でソ連人と一緒に働いている者にはアクチーブの人たちも意地悪をしなかったので助かりました。

三、マラリアの発熱で生命拾い

私は、マラリアになって高熱にうなされると必

ず故郷にいる父や母が「徳、死ぬなよ、生きて日本へ帰るだぞ!!」と励ましてくれる夢を見ました。それもあつて、生死の境に立った時は「死んでたまるか、生きて日本に帰るのだ」と自分で自分を励ましてきました。

昭和二十三年六月中旬ころ、炭坑から帰ると収容所長から「貴殿らはよく働いてくれたのでスターリン閣下は約束通り東京ダモイが許可された」と自慢げにダモイを言い渡した。私どもは半信半疑でまだだまされるのかと思っていると、翌朝早々出発命令。「生命だけ持てば何も要らない」と空っぽの雑のうをぶら下げて汽車に飛び乗った。

昭和二十三年七月二日ナホトカ港に着いた私どもは、二週間ナホトカ収容所で「日本上陸のために理論武装教育を行う」と決めつけられ、「共産党革命論」とか、「赤旗の歌」とか、「天皇制打倒論」とかを宣教されたので、何でもハイ、ハイと勉強しました。

七月十一日早朝、日の丸の国旗を掲げた日本船「恵山丸」がナホトカ港に接岸した。私どもを迎えに来てくれた復員船である。

乗船名簿を読み上げられた戦友は涙をこぼしながら船上の人となる。「奥脇徳」「ハイ」と大声を上げたが一緒に涙がこぼれた。これで地獄は脱出だ、日本に帰れるぞ!! とタラップを踏み締めた。

船中では真っ白い御飯に鯛の頭つき。「兵隊さん御苦労さまでした」と女の子の放送に、生きて帰ったのだと実感した。

翌十二日、抑留者二千人を乗せた「恵山丸」は舞鶴港に入港、私どもは婦人会の人々の日の丸の旗に迎えられ舞鶴港に上陸。それから丸一日、ソ連抑留中の概要を米軍のGHQという人たちから根掘り葉掘り聞かれた後、一金八百円也の上陸手当をいただいた、山梨県庁から迎えに来てくれた復員係官に案内されて帰郷しました。

四、家族や国民の皆さんに遺したいことば

帰国後約半年くらい、私は栄養失調症や抑留疲労のための静養をしましたが、父の家業である織物業（甲斐絹や洋服地等）に専念し、工場を経営して祖国再建のためにと頑張り通しましたが、どんなに仕事が苦勞な時も、シベリアの抑留生活を思えば「このくらいのことだ」と頑張ることができました。また、シベリアで亡くなった戦友の慰霊や遺骨収集のため全国強制抑留者協会に加入して、コムソモリスク、イルクーツク等の墓地調査（調査班長渡辺時雄氏）に参加しました。

今こうして苦しかったシベリア抑留時代の報告記を書き終わったとき、ぜひ、私の子孫や若い国民の皆さんに遺しておきたいことばがあります。それは「平和」の一言であります。世界中の人が平和を愛し、二度と再び戦争をなくし、我々のような犠牲者を出さないようにして下さい。

そして家中仲良く、よく働けば家も安泰で栄えることでしょう。

以上、お願いし、私の抑留労苦の報告を終わります。

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 渡 辺 龍 三

私は、大正十二（一九二三）年二月十日、霊峰富士山麓で出生、東京通信講習所を卒業後郵便局に勤務中、昭和十九（一九四四）年一月五日、現役兵として東京麻布近衛師団東部第一六部隊（通信隊）に入隊、直ちに満州国錦州第二七師団付通信隊に配属され、錦州付近の警備に当たりながら師団の通信勤務に従事しておりました。

一、ソ連攻撃からシベリア抑留まで

昭和二十年八月十日、私どもはソ連、満州、朝鮮、三国国境の琿春山岳地帯に展開した第一一二師団司令部の暗号解読通信隊として琿春司令部の